

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370094

研究課題名(和文)浪曲の「節」の生成原理に関する研究

研究課題名(英文)Generative Principle of Melodic fragment in Rokyoku

研究代表者

北川 純子 (Kitagawa, Junko)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00379322

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、予め記譜された旋律を再現するわけではない浪曲実演における「節」の生成原理を、〔骨格式〕に基づく分析により明らかにした。〔骨格式〕は、詞章文言「なにがなにしてなんどやら」の単位に充てられた旋律断片を、開始音、保続音、終結音の枠組として簡潔化した図式である。〔骨格式〕に基づき、同一演者による複数演題および異なる演者による同一演題の「節」を比較分析した結果、浪曲の「節」は、演者ごとに異なる〔骨格式〕に還元される旋律断片を「使い回し」ながら半即興的に生成されていること、同じ「家」に属する演者は、同一あるいは類似した〔骨格式〕に還元されるような旋律断片を用いていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In the recitation of naniwabushi, performers do not reproduce the melodies that have been notated in advance. In this study, I examine the generative principle of 'fushi' (melody) in naniwabushi through an analysis based on the 'skeletal formula'. The 'skeletal formula' is the tonal path of a melodic fragment that is assigned to the conceptual sentence 'nani ga nani shite nantoyara', which constitutes the starting, sustaining, and finishing tones. The results of the analysis are as follows: (1) Every performer semi-improvises a series of melodic fragment based on his/her characteristic 'skeletal formula'. (2) The performers belonging to the same 'ie' (school) tend to use the same or similar melodic fragments in the context of 'skeletal formula'.

研究分野：芸術一般

キーワード：浪花節 浪曲 骨格式 定型性と変形性 旋律断片 家(流派)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に先立ち、研究代表者は、浪曲三味線の「手」(楽器により奏される小旋律型)について採譜と整理を行うとともに、「手」の史的展開について研究を実施した(科学研究費助成、基盤研究(C)2011-2013年、課題番号23520170、浪曲三味線の「手」の史的形成過程に関する研究)。

(2) その成果をふまえ、浪曲の核心でもある、浪曲師の「節」(声により表出される小旋律型)についても、音楽学的な分析を行えるのではないかと発想をもつようになった。

(3) 浪曲の「節」は、個々の演者によって異なるとの側面がこれまで強調されてきたが、演者ごとの「節」の特性を客観的に把握しうる方法を案出することにより、各演者の個人様式の特性の析出、演者間の「節」の比較、それらをふまえた「節」の考察が可能になると考え、本研究では、そうした分析方法の案出と適用とを、主たる作業内容として置くこととした。

2. 研究の目的

以下の三点を目的とした。

(1) 浪曲の「節 A」と「節 B」を比較しうる分析枠組みを案出する。

(2) 青写真としての規範的楽譜が実演前に存在するわけではない浪曲での、「節」の定型性と変形性のありようを整理し、個々の演者が「節」をどのように生成しているのかという原理を明らかにする。

(3) 個々の演者の「節」の様式と、「家」(流派)の様式の継承との関わりを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) プロの浪曲師の稽古の場での様子と、アマチュアの浪曲愛好家たちの集まりの場での様子、両方の現場に立ち合わせていただくフィールドワークを行い、プロとアマの「節」に対する意識の違い、「節」を精練させてゆくやりかたを観察する。

(2) 上記の観察結果もふまえ、第一に、同一演者により別の機会に誦された「節」、第二に、異なる演者間の「節」、を比較しうる分析枠組みを案出する。

(3) 案出した分析枠組みに基づき、個々の演者の「節」の特徴の析出、「家」が異なる演者同士の「節」の比較、同じ「家」に属する演者たちの「節」の比較を行う。これにより、案出した分析枠組みの有効性を検証するとともに、「節」の生成原理について、推論を導出する。

4. 研究成果

(1) フィールドワークから、第一に、プロの浪曲師は、自分なりの「節」を作る試みを、師匠からの示唆により、相対的に早い時期から行っていること、第二に、アマチュアの場合には、過去に活躍したプロの浪曲師の「節」の一席全体を音盤通りに真似て誦す期間が相対的に長いものの、長期にわたり経験を積む過程で、音盤の手本とは異なる「節」を生成しようとする意欲をもつようになることがわかった。すなわち、浪曲を誦する訓練の過程には、大筋として、師匠(あるいは好みの演者)の「節」を真似る段階から、独自の「節」を編み出す段階への移行があり、プロの場合には師匠からの働きかけによって、後者の段階が相対的に早い時期に設定される場合があると考えられた。

(2) 師匠から弟子への稽古の場のフィールドワークから、弟子が新しい演題を課されて「節」を付けてゆくにあたっては、一席全体というマクロなレベルではなく、おおむね、浪曲の理念的かつ実践的詞章文言として使われている「なにがなにして なんとやら」に対応する長さをもつ単位での旋律断片に関して、師匠を真似、旋律断片相互をつなげようとし、時には独自の旋律断片を編み出してゆこうとする様子が見られた。このことは、一席全体を真似ようとするアマチュアとは大きく異なると考えられるとともに、経験豊かなプロの浪曲師が、自らの練習をしたり弟子に稽古をつけたり、時には実演現場で詞章文言を忘れた場合、当該の理念的文言「なにがなにして なんとやら」を発声し、その連続で浪曲を誦することがしばしばあるという実態と、論理的整合性をもつと考えられた。

(3) 上記をふまえ、「節」の分析枠組みの検討にあたっては、文言「なにがなにして なんとやら」の長さに対応する単位の旋律断片に焦点を定めることとし、筆者独自の[骨格式]を案出した。[骨格式]は、個々の旋律断片を、開始音、持続音、終結音の骨組みとして捉える図式である。こうした考え方をとるにあたっては、西洋音楽におけるシェンカー分析や、日本音楽を素材に柴田南雄が行った「骸骨図」からも着想を得たが、本研究における[骨格式]の場合には、一点目に、対象を浪曲に特化させた(他のジャンルには適用できない)分析枠組みであること、二点目に、「なにがなにして なんとやら」(7 モーラ+5 モーラ)という短い旋律断片に焦点を定めていること、の二点が特徴である。

(4) [骨格式]を用いて複数の浪曲の分析を行った結果は、以下の通りである。

(4)-1 初代春日井梅鶯の浪曲の分析から、彼の「節」は、「キザミ」(等価の拍に乘る基本の「節」)の始まりと終わりでは、同一の[骨格式]に還元される旋律断片が複数

の「節」に共通して使われており、その意味で、ある種の固定性をもっていること、同じく「キザミ」での途中の「節」は、順序性を有する3種の旋律断片が循環的に使用されるという構造を有していること、「キッカケ」(自由リズムの「節」)の始まりと終わりでは、同一の[骨格式]に還元される旋律断片が複数の「節」に共通して使われており、「キザミ」と同様、ある種の固定性をもつこと、「キザミ」と「キッカケ」では、使用される[骨格式]が異なること、すなわち、等価の拍に乗る「節」と自由リズムの「節」では、誦される旋律断片の特徴が異なること、テンポが相対的に速く、等価の拍に乗る「はやぶし」では、「キザミ」と「キッカケ」に使われる[骨格式]の両方が使用されること、すなわち、「キザミ」と「キッカケ」の旋律断片を適宜織り交ぜながら応用することにより、速い「節」を紡いでいると考えられること、特定の[骨格式]に還元される旋律断片群に着眼した時、そこに乗せられる文言は、「なにがなににして なんとやら」(7モーラ+5モーラ)に限定されるわけではなく、より少ない、あるいはより多いモーラ数の文言にも、同じ特性を有する旋律断片が充てられている例が複数見られること、が明らかになった。以上から、初代梅鶯の浪曲に関しては、演者が、特定の[骨格式]を備えた、いわばモデル旋律断片群を、実演現場で半即興的に連結し、全体としての「節」を生成していると考えられた(発表論文)。譜例1は、初代梅鶯《赤垣源蔵》の「キザミ」において、[骨格式]sfm1~sfm2~sfm3に還元される旋律断片群で開始される「節」が、その後、sfm4~sfm5~sfm6の3種の[骨格式]に還元される旋律断片群による順序性と循環性をもった再起により続けられてゆくこと(上記(4)-1-)を示す分析譜である。

譜例1 初代梅鶯《赤垣》の「キザミ」の構造(部分)

(4)-2 初代東家浦太郎の浪曲の分析から、彼の「節」には、「落とし」(ひとまとまりの「節」の終結部分)の箇所ほとんどで、特定の[骨格式]に還元できる旋律断片が使われ、異なる文言モーラ数を適宜あてはめるやりかたで、当該部分の「節」が生成されていることがわかった。初代梅鶯と同じく、初代浦太郎に関しても、第一に、旋律断片がひとまとまりの「節」において占める位置あるいは機能に応じて、ある種の固定性が見られること、第二に、異なるモーラ数の文言をやりくりしながら特定の[骨格式]に還元される旋律断片に当てはめる形で「節」が生成されていること、が明らかになった。初代梅鶯ならびに初代浦太郎に共通して見ることができるのは、同じ[骨格式]に還元される旋律断片に、モーラ数の異なる文言を適合させてゆくやり方である。このことから、浪曲の演者は、自身固有の旋律断片について明確な意識を有しつつ、それを使用・応用して「節」を上演現場で紡いでいると考えられた(発表論文)。

(4)-3 明治期から昭和初期にかけて活動した、桃中軒家と吉田家の複数の浪曲師による「節」を比較したところ、それぞれの「家」によって、使用される旋律断片の[骨格式]は異なること、同じ「家」の演者は、同一あるいは類似した[骨格式]に還元されるような旋律断片を用いていること、が明らかになった(発表論文)。

(4)-4 大正期以降、奈良丸くずしの題名でこんにちまで流通している流行り歌が、二代吉田奈良丸の浪曲のどの旋律断片を用いているかが、[骨格式]を用いた分析により、特定された。具体的には、二代奈良丸本人が、自身の浪曲において「あした待たるる 宝船」(討入前に宝井其角と出会った大高源吾がよんだとされる返句であり、大高源吾を題材とした浪曲のほとんどに引用され、流行り歌 奈良丸くずし の歌詞の一部として現在まで残っている文言)に付した旋律断片ではなく、奈良丸が異なる複数の文言に付す形で頻用し、弟子たちにも継承された特定の旋律断片が、奈良丸くずしに移植されたことが明らかになった(発表論文)。

以上の結果から、一点目に、今回の研究で案出した[骨格式]に基づく浪曲の「節」の分析方法が、演者ごとの「節」の特徴や、演者間の「節」の比較を行う上で、一定程度有効であることが確かめられ、二点目に、浪曲の「節」は、基本的には、文言「なにがなににして なんとやら」の単位に対応し、特定の[骨格式]に還元されるような、いわばモデル旋律断片群(演者によって異なる一方で、同じ演者は異なる演題を誦す場合にも同じあるいは類似性をもつ旋律断片を用い、また、同じ「家」に属する演者は、同じあるいは類

似性をもつ旋律断片を用いる)が、文言のイントネーションやモーラ数との関係で加工もされながら半即興的に連結され、生成される、との推論が導出された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

北川純子、2014、浪曲の『語り』の生成原理をめぐる予備研究(前編) 野狐三次を素材に、大阪教育大学紀要第 部門、査読無、63巻1号:17-34.

北川純子、2015a、宮崎滔天による浪花節台本『天草四郎』をめくって、大阪教育大学紀要第 部門、査読無、63巻2号:25-45.

北川純子、2015b、桃中軒雲右衛門と二代吉田奈良丸 浪曲の『節』の分析・試論、大阪教育大学紀要第 部門、査読無、64巻1号:47-66.

北川純子、2016a、浪曲の『語り』の生成原理をめぐる予備研究 野狐三次を素材に(後編)、大阪教育大学紀要第 部門、査読無、64巻2号:33-52.

北川純子、2016b、初代春日井梅鶯における浪曲の「節」における定型性と変形性、大阪教育大学紀要大 部門、査読無、65巻1号:13-31.

北川純子、2017、浪花節の「家」による様式をめくって 「奈良丸くずし」は何をくずしたのか、大阪教育大学紀要第 部門、査読無、65巻2号:23-43.

〔学会発表〕(計1件)

北川純子、2016年9月22日、明治~大正期の『女流』浪花節語り、国際日本文化研究センター共同研究「浪花節の生成と展開についての学際的研究」研究会.

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等

雑誌論文

<http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/27988>

雑誌論文

<http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/28200>

雑誌論文

<http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/28618>

雑誌論文

<http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/28746>

雑誌論文

<http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/29005>

雑誌論文

<http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/30004>

6. 研究組織

(1)研究代表者

北川 純子(KITAGAWA, Junko)
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号:00379322

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者 なし